

「まちづくり」のための市民活動 資金を活用した「認知症カフェ」 開設の運営支援



医療法人豊田会 刈谷中部地域包括支援センター
愛知県 刈谷市 認知症地域支援推進員 大羽 啓允

刈谷市

刈谷市は愛知県のほぼ中央に位置し、西三河平野西部にある衣浦湾へ注ぐ逢妻川の下流に面しています。市の中央部には最先端技術を駆使した自動車関連産業の工場が並び、活気に満ちあふれています。また、伊勢湾岸自動車道の刈谷パーキングエリアと岩ヶ池公園を一体的に整備した刈谷ハイウェイオアシスは、連日多くの人でにぎわっています。

刈谷市は産業と文化が調和したものづくりのまちとして飛躍的に発展してきました。先人の創意工夫とたゆみない努力を受け継ぎ、将来にわたり持続可能な地域社会を形成するため、市民・企業・行政が共に支えあう「共存・協働のまちづくり」を推進し、本市の最上位計画で掲げている将来都市像「人が輝く 安心快適な産業文化都市」の実現を目指しています。



面積	50.39平方キロメートル
人口 (令和元年5月1日現在)	152,539人 (男性80,101人、女性72,438人)
世帯数	66,727世帯
高齢化率	19.92 %

認知症地域支援推進員 設置状況

【地域包括支援センター】

⇒ 市内4センターで担当地域を設けている

日常生活圏域⇒3圏域(中学校区 6校区)

- ・北部地区・・・地域型 ⇒ 中学校区 2校区
- ・中部地区・・・基幹型 ⇒ 小学校区 2校区
- 機能強化型 ⇒ 小学校区 3校区
- ・南部地区・・・地域型 ⇒ 中学校区 2校区

(4センターを各受託法人が運営)

◆認知症地域支援推進員設置状況

平成27年度より、全域で2.5名を配置

⇒ 機能強化型へ専任1名、他センターへ0.5名配置

私たち、 認知症地域支 援推進員です！

高齢者の相談窓口として市内4か所に設置されている地域包括支援センターに認知症地域支援推進員を配置しました。

認知症地域支援推進員とは

認知症になって困っている人や、不安定な生活を送っている家族から相談を受けたり、医療・介護・地域の支援サービスにつなげる役割を担っています。推進員の配置によって認知症になった後もできる限り住み慣れた環境で生活を送ることができる地域づくりを目的としています。現地の具体的な活動としては、認知症グループホームの施設職員が集う情報交換会を開催したり、認知症カフェの開設のサポートをしたりしています。

グループホーム施設職員の皆さんと積極的に情報交換をしています！



富士松地域包括支援センター 林周作



中部地域包括支援センター 大羽啓允



中央地域包括支援センター 内藤久美



依佐美地域包括支援センター 鈴木健司

富士松地域包括支援センター (☎62-3033)
(特別養護老人ホーム洲原はーむ併設)
受付時間 月～金曜日(年末年始除く) 9時～18時

依佐美地域包括支援センター (☎63-5235)
(介護老人保健施設がかりや内)
受付時間 月～土曜日(祝日・年末年始除く) 9時～17時

御幸町に 認知症カフェふるさとOpen!

認知症カフェとは？

認知症の人と家族、地域住民、専門職など誰でも参加でき、お茶を飲みながら交流を楽しむ場です。また、認知症に関する相談をはじめ、バンド演奏、産直市などさまざまなイベントも開催しています！

6月5日(日)(毎月第1日曜日) 10時～16時

※申込不要・出入自由

※年末年始など変更になる場合があります。

※サービスエリア(御幸町3-70)

※認知症の人と家族、地域住民、専門職などなたでも200円(コーヒー・おやつ付)

※NPO法人西三河在宅介護センター(☎80-0285)



認知症の人やその家族が、さまざまなサービスを活用して、気兼ねなく暮らせる地域を実現したいと考えています。お互いに声を掛け合い支え合い、健康に暮らせるまちづくりがキーワードです。優しい気持ちで見守り合えるといいですね！



中部地域包括支援センター 大羽啓允

人が多く 安心快適な産業文化都市

ガリヤ

KARIYA PUBLIC RELATIONS

市民だより
2016 No.2150
5/15

移動動物園がやってきた！
岩手池公園

私たち、認知症地域支援推進員です！
あなたとわたしのハニー P2
かりや夢ランド補助遊具事業 P4
岩手のみちを見に行こう P8
日本女子ソフトボールリーグ1部
第4期・岩手大会 P9



担当地区の概要

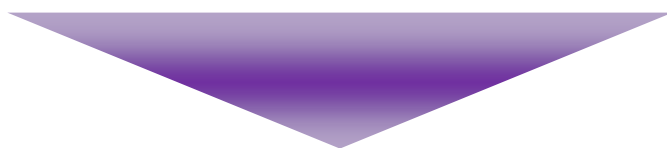
刈谷市の中心地、都市部の圏域。
大手企業の本社がいくつもある企業城下町。
通勤時間帯は交通量が多く「市内外の人が集まる」地域として活気にあふれている。企業で働いている方・働いていた方が多く住んでおり、地域活動へ積極的に参画している。

中部圏域の北側	3小学校区
人口 (令和元年5月1日現在)	33,155 人 (男性 17,358人、女性 15,797人)
世帯数	15,131 世帯
高齢化率	18.52%

(令和元年5月1日現在)

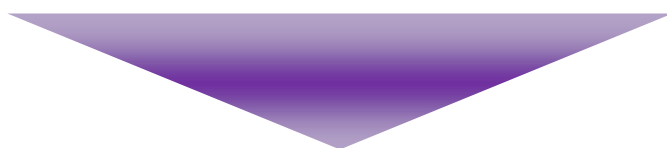
刈谷市全域人口

	全年齡	65歳以上	高齢化率	世帯数
男	80,101	13,959	17.43%	
女	72,438	16,430	22.68%	
計	152,539	30,389	19.92%	66,727



中部地区(日常圏域)

	全年齡	65歳以上	高齢化率	世帯数
男	29,301	4,735	16.16%	
女	27,085	5,865	21.65%	
計	56,386	10,600	18.80%	25,059



中部包括担当地区

	全年齡	65歳以上	高齢化率	世帯数
男	17,358	2,765	15.93%	
女	15,797	3,374	21.36%	
計	33,155	6,139	18.52%	15,131

刈谷市の高齢者施策

【基本理念】

支えあい元気で安心して暮らせる
長寿社会の創造

～身近な地域で安心して暮らせる地域包括ケアシステムの深化・推進～

【重点施策】

- (1) 在宅医療・介護連携の推進
- (2) 認知症施策の推進

認知症施策の推進

【重点的に取り組むこと】

①認知症の人を支える体制づくり

2018(平成30)年度から設置する認知症初期集中支援チームや認知症地域支援推進員の活動を推進するとともに、認知症サポーターステップアップ講座の開催、徘徊高齢者搜索模擬訓練の実施等、認知症の人を社会全体で支える体制づくりを推進します。

②介護する家族に対する支援の充実

認知症カフェの拡充や認知症家族支援プログラム、認知症介護家族交流会の開催等、認知症の人を介護する家族の負担を軽減する取り組みを充実します。

刈谷市の認知症施策

【介護予防】

介護予防普及啓発事業

男性のための栄養教室

高齢者簡単クッキング

げんき度測定・エンジョイ教室

カミカミ体操

介護予防ポイント事業

【家族支援】

認知症家族支援プログラム

認知症介護家族交流会

認知症個別相談

⇒専門医による予約制相談

【見守り支援】

認知症サポーター養成講座

⇒ステップアップ講座

徘徊高齢者家族支援事業

⇒探知機貸与

徘徊高齢者搜索模擬訓練⇒年1回

行方不明高齢者SOSネットワーク

⇒見守りシール

メール配信サービス

【認知症カフェ】

市内8か所で主催者が自主開催

【成年後見制度】

成年後見支援センターが啓発

刈谷市の認知症施策

認知症の進行に応じた変化		⇒あれ？物忘れかな（初期）	⇒そろそろ誰かの見守りが必要（中期）	⇒日常生活に手助けが必要（後期）	⇒常に手助けが必要
本人の様子	なんとなくおかしいと感じて不安になる。	●物忘れ ●同じことを繰り返し聞く ●片付けが苦手になる ●物が無くなる ●外出がおっくうになる	●小銭での支払いが苦手になる ●探し物の時間が増える ●食事の支度が一人では難しい ●火の消し忘れ ●金銭管理や支払いが難しくなる	●トイレの場所がわからない ●道に迷って帰ってこれない ●日にちや季節がわからなくなる ●洋服の着かたがわからない	●自分で食事ができなくなる ●言葉でのコミュニケーションが難しい ●歩行困難 ●起き上がるのに介助が必要
家族の気持ちと対応	認知症は家族のかかわり方や環境調整により症状は変化し、気持ちの変化は人それぞれです。	家族会や勉強会に参加すると、いろいろな情報が得られます。	悩みを打ち明けられないで、一人で悩んでしまいがち ⇒抱え込まずに相談することが大事。家族の病気への理解が認知症状に影響します。	本人の失敗が増え、介護疲れを感じる。休みたいくなる。 ⇒介護サービス等を利用し、休養できる時間を作る	最後の過ごし方や看取りが心配 ⇒元気なうちに本人の意向を確認する
本人やまわりの人が、やっておきたい事、決めておきたい事	友人や地域とのつながりを大切にする 例）地域の活動 いきいきクラブ サロンへの参加	・周りの人への相談 ・一日の計画を立てて生活する ・かかりつけ医・地域包括支援センターへの相談 ・外出の機会を作る ・元気なうちから、生前整理をする	・一人でできないことは手伝ってもらう ・相談できる人を探す ・外出したり、人に会う機会を作る ・将来に備え、成年後見制度の利用を検討する	・本人の得意なことを活かせる環境づくり ・介護サービスの利用 ・施設入所の検討・事前の見学	
介護保険	申請の相談	介護認定の取得・介護サービスの利用			家族の介護負担の軽減
認知症の人や家族を支援する体制	予 防	ボランティア活動 シルバー人材センター いきいきクラブ サークル活動 サロン活動 認知症カフェ			
	医 療	かかりつけ医			

* 認知症かも、と思った時には、まずは「かかりつけ医」に相談しましょう。

北部圏域【地域型】
刈谷富士松
地域包括支援センター

推進員 ⇒ 0.5名

初期集中支援チーム
⇒0.25名を兼務で2名

中部圏域北
【機能強化・地域型】
刈谷中部
地域包括支援センター

推進員 ⇒ 1名

初期集中支援チーム
⇒0.25名を兼務で2名

中部圏域南
【基幹・地域型】
刈谷中央
地域包括支援センター

推進員 ⇒ 0.5名

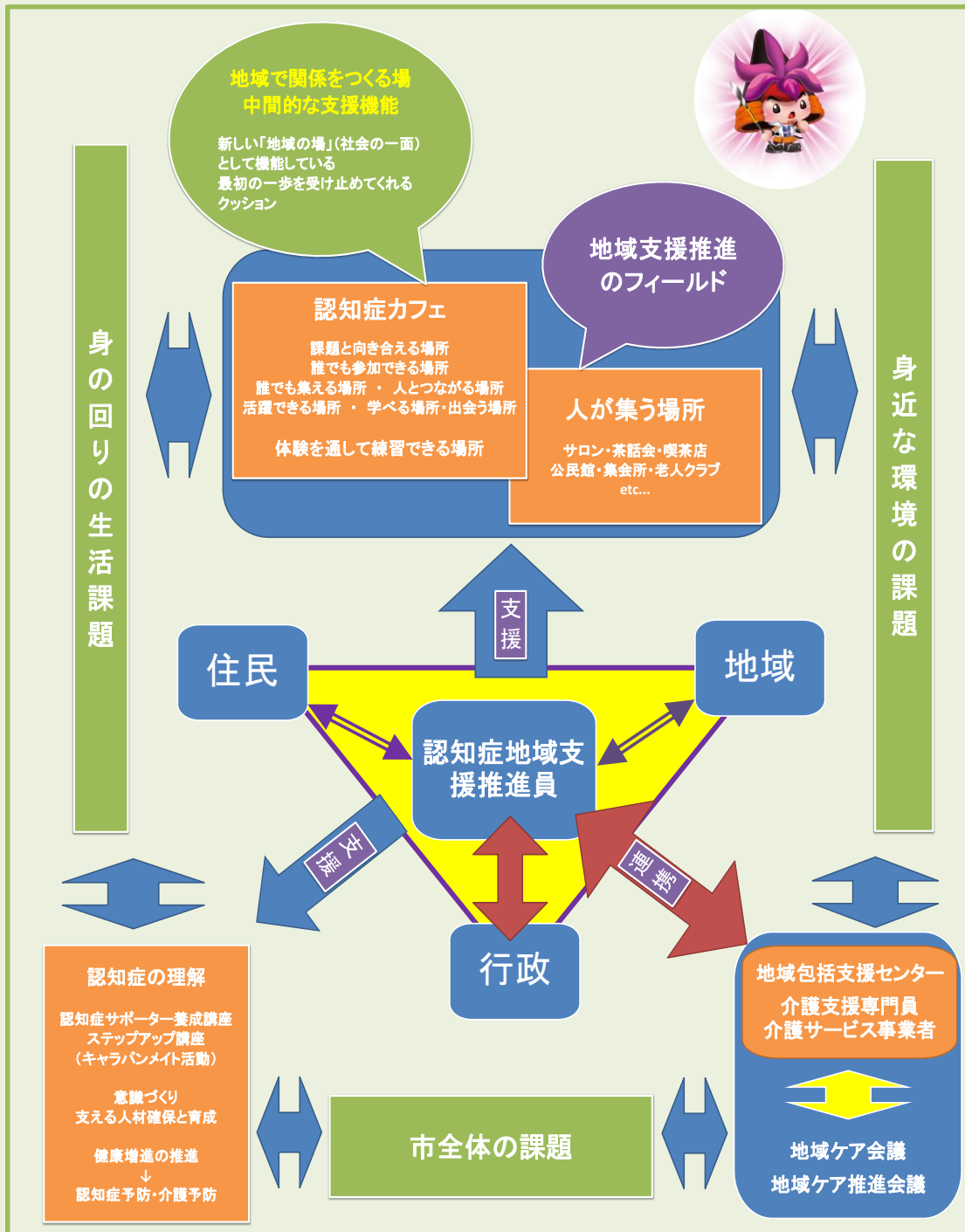
初期集中支援チーム
⇒0.25名を兼務で2名

南部圏域【地域型】
刈谷依佐美
地域包括支援センター

推進員 ⇒ 0.5名

初期集中支援チーム
⇒0.25名を兼務で2名

★認知症地域支援推進員★ 支援活動イメージ図



推進員の役割

平成27年4月、認知症地域支援推進員が配置
⇒前月まで主任介護支援専門員として
「社会資源の開発」「ネットワーク化」が役割
の中心だった。
「認知症全般を担当」と配置転換

「認知症地域支援推進員の仕事って何するの？」
と周囲から聞かれることばかりの4月を迎えて、
「私はいったい何をやったらよいのだろうか？」
と不安だらけのスタート

専任⇒「まとめ役」 何だろうか？

★私ひとりだけしかいない役割

・・・相談できる人がいない ⇒ 仲間が必要だ！

推進員予定者全員の養成研修受講が修了を待つ
市全体で活動開始できる体制の準備に動き出す

【モラトリウムな期間を有効活用】

⇒「平成27年度末までに長期的な活動の土台を
どのようにつくるか」を課題にあげた

⇒「調査⇒課題抽出⇒目標設定」を図ったのが
最初の活動。

【活動報告】

「まちづくり」のための

市民活動資金を活用した

「認知症カフェ」開設の運営支援



相談：「認知症カフェってどんなふうに やったらいいの？」

⇒NPO法人が運営する認知症対応型デイサービス
管理者からの相談がきっかけ

地域の中で「やりたい！」と思っている方の
気持ちを大切にすることから始めることが
地域とつながる最初の一步！と考えて、
サポートできる体制を調整したことが始まり

サポート開始！まずは何を？

「認知症カフェがやりたい！」という声に耳を傾けて、「何から始めたらいいの？」から一緒に考えた。

事業所・法人内でカフェを運営する人にも思いはそれぞれあり、協力体制という土台をつくって外部に拡大していくプロセスを主催担当者と経験を共にした。

地域の中に「経験者」を増やすことで地域全体のボトムアップを狙った

具体的に開催の話を進めていくと・・・

「カフェの運営費をどうするか？」という難題

当初、法人は地域貢献を根ざす活動趣旨を踏まえて、自己資金運営を検討していたが、初期投資の負担を考えると定期的・継続的な開催に困難さを感じていた。誰もが足を運べる場所である認知症カフェづくりは「まちづくり」でもあり、助成金の活用を検討し、かりや夢ファンドを活用して資金調達に取り組んだ。

「コミュニティ・カフェ“ふるさと”」

開催場所：デイサービスふる里
(認知症対応型デイサービス)

開催頻度：毎月 第1日曜日

時 間：10～16時(現在は10～13時)

参加費：200円



ボランティアが自立して活動できるための支援

「スタッフの人件費問題」

NPO法人のデイサービスで働いている方といっても、カフェ運営日は休日。人件費が出ているわけではなく、ボランティア形式で開催する状況だった。
そのため「ボランティアへの支援」という側面があった。

相談が入った段階でその思いを大切にすることがあり、「今すぐに動く！」という事よりも、「その気持ちが続いてつながる」ことを意識して行動した。「介護サービス事業を中心に良心的に運営しているNPO」というイメージだけでなく、いずれは「地域の中核を担える場」(ボランティアコーディネートが出来る場・拠点)として機能することを期待して、この協働した体験が次のステップにつながるように配慮してサポートした。

活動の効果

●市内の事業所が運営する認知症カフェの拡大

平成28年度からの30年度までの間に8か所の認知症カフェが活動を開始した。すべてが自主的な活動であり、「認知症カフェ」としての助成金はなかった。一方で、企業城下町で育まれた社会貢献や地域協働への意識の高さが地域のベースとして根付いており、各々が自分たちのスタイルに合わせた活動を展開している。

活動の効果

●推進員のもつ「情報発信のハブ機能」の発揮

情報を発信するハブ機能として推進員の持っているネットワークを大幅に拡大できた。「かりや夢ファンド」を展開する「刈谷市民ボランティア活動センター」とは様々な事業を協働で行うこととなり、認知症サポーターステップアップ講座のグループワークではファシリテーター役として一般の方が司会を行い、企画段階から協働が実現している。

見えてきた課題と今後の方向性

● 普通の暮らしの中で「認知症の方も誰でも過ごせる場」を少しずつ増やすこと

⇒「認知症の方が地域社会の中で気兼ねなく、役割をもって笑顔で暮らせる生活」を目指して活動を展開してきた。

⇒認知症カフェは、気兼ねせずに過ごせる地域スペースとして機能することで、個人と地域のクッションの役割を果たす中間的な機能(場所)。

⇒カフェの形態に限らず、サロンや集い・茶話会など、さまざまな形の場が地域の中にはあり、私たちは後から知ることが多い。

見えてきた課題と今後の方向性

●普通の暮らしの中で「認知症の方も誰でも過ごせる場」を少しずつ増やすこと

地域の中にある既存の「場」を

⇒「認知症の方も活用できる場」にできること、

⇒誰もが利用できて地域で起こっている出来事を「自分のこと」に身を置いて考えられること、

そんな場面を地域の暮らしの中にたくさん作っていくことで
「認知症の方の地域の暮らし」を作っていく必要がある。

見えてきた支援のポイント

- 起点になるネットワーク(循環)を継続的に機能させるには、支える機能(役割)を同時に準備しておくで循環が途切れない。
- 地域の暮らしの主体は住んでいる人！
認知症の人まちづくりのメンバーの1人
- 情報をキャッチするアンテナと発信するスピーカーは、大きさよりも数が多いほうが伝わり易い。

見えてきた支援のポイント

- 同じ回覧板でも、回し方や準備の仕方が違った。地域での暮らしを支えるために必要な情報は暮らしている人からしか得られない。
- 協働する目標設定(ゴール)は情報とイメージの共有が大切。経験を共有することで、お互いの価値観を知ることができる。
- 「認知症」のことだからといって所管部課の事業費だけしか使えないわけではない。まちづくりはそこに住んで関わっている方すべてが対象。